

## 子どもが“つながり”、成長を実感できる学級づくり

### ～継続した学級単位 SST を通しての実践研究～

副島 典子（子ども理解・特別支援教育実践コース） 内野 成美

キーワード： つながり、学級単位 SST（CSST）、Q-U

#### I. 研究の背景と目的

近年、学習や生活において特別な配慮を必要とする子が増えている。文部科学省の調査（2012）によると、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合は、6.5%とされている。配慮が必要な子どもへの支援を考える際には、周りの友達や集団も合わせて考える必要があることから、通常学級の特別支援教育には、学級集団の安定が不可欠であると言える。学級集団の安定のためには、教師と子どものつながりはもちろん、子ども同士のつながりが大切である。そこで注目されるのが、グループアプローチである。その中でも、核家族化や地域の教育力の低下など子どもを取り巻く環境が変化して人間関係が希薄になったことにより、ソーシャルスキルが身につかなくなっている背景から、学校現場に多く取り入れられているものとして、ソーシャルスキルトレーニング（SST）がある。ソーシャルスキルは、ライフスキルの中に含まれるスキルでもあり、ライフサイクルにおいて、児童期は役割取得の能力が発達し、対人関係の能力も必要となる時期であり、思春期から重要となるライフスキルの獲得のためにも、小学生段階で必要なソーシャルスキルを身につけることは、非常に重要な課題だと言える（図1）。

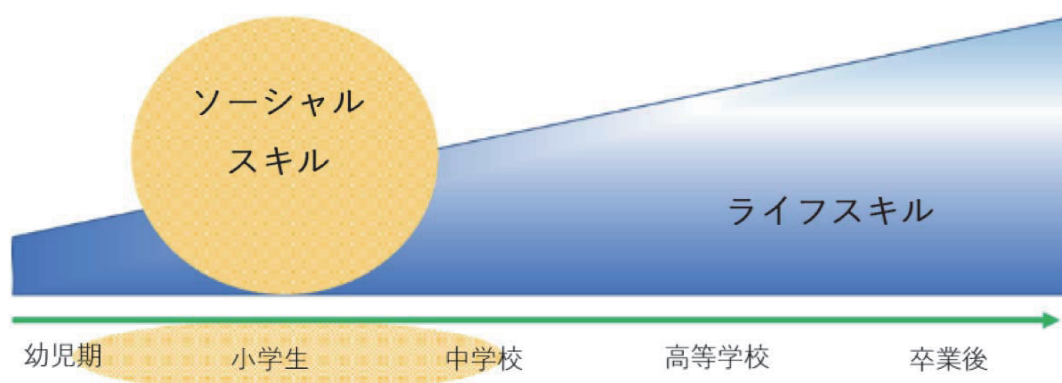


図1 ライフスキルとソーシャルスキルの関係（NPO 星槎教育研究所伊藤 2009 をもとに作成）

ソーシャルスキルは、人と関わるチャンスがあつてこそ、課題やSSTの方略も見えてくるものであり、適切な集団の存在なくしては、力となり身につくことはない。藤枝・相川（2001）も、学級は、児童が対人関係を維持していく上で必要とされる社会的スキルを学習する絶好の場所と考えられると述べている。また、通常の学級には、診断を受けていない「気がかりな子」が在籍し、取り出してSSTを施行できない場面が少なからずある。そこで、最近実施されることが多くなったのが、学級単位 SST（Classwide Social Skills Training, 以下CSST）である。藤枝・相川（2001）によると、CSSTの実施には、次の3点が期待できるという。

①児童全員が参加することで、全児童が社会的スキルの学習機会を得ることができる。対人関係上に問題がある児童が、社会的スキルを獲得できるのはもちろんのこと、すでに適切な反応を獲得している児童もCSSTを通して、それまで無自覚に行っていた反応を意識的に実行し、応用できるようになる。このように児童が他の児童にフィードバックを与えることもできる。つまり、社会的スキルの学習におけ

る促進効果が期待できる。

②社会的スキルの般化効果が期待できる。児童全員が訓練に参加することで、相互の行動上の変化に気づきやすくなる。また、児童相互が、日常場面の中で仲間の適切なスキルの実行にフィードバックを与えることができる。日常場面のフィードバックは、獲得した社会的スキルの般化を促進させると考えられる (Slobada1986)。

③CSST ならば、担任教師が通常の授業時間において無理なく実施できる。CSST ならば、学級全体を対象として実施することから道徳や学級活動、総合的な学習の時間等に組み込んで実施することが可能である。

これらのことから、本研究では、予防的・成長促進的な観点から意図的に社会的スキルの学習機会を提供する CSST を計画的・継続的に行うことを中心に実践を行い、効果を検証した。

## Ⅱ. 方 法

### (1) 対象と期間

対象：X 市立 A 小学校 第 4 学年 B 組 (男子 18 名、女子 13 名、情緒特別支援学級男子 3 名、女子 1 名)

期間：2019 年 5 月～2019 年 12 月 (週 1 回、毎週火曜日)

### (2) 実態把握とその結果

#### ①観察や担任教師からの聞き取り

- ・他学年に比べ、全体的に行動面や学習面において、個別の支援を要する児童が多い。
- ・前年度は、集団としてうまく機能しない状態になった学級が見られた。そのため、対人面での関係を考慮した学級編成が行われている。
- ・印象としては、活動的で元気がある。しかし、そのエネルギーがある分、悪気がなく、率直に相手に強い言葉を向けたり、行動をとったりして、それがきっかけでトラブルになることもある。
- ・友人関係が固定化している。
- ・学習をがんばろうとする児童が多いが、中には一見すると投げやりのような様子を示す児童もいる。
- ・一人一人は素直だが、集団としては年齢相応よりもやや幼い様子。構ってほしい、見てほしいという気持ちが強いように見受けられる。

#### ②Q-U (楽しい学校生活を送るためのアンケート)

- ・学級満足度尺度の分布は、斜めに伸びた状態であり、学級集団に満足している児童とそうでない児童の差が大きくなっている。
- ・教師の観察と自己認知にズレが見られる児童もいる。

#### ③ソシオメトリックテスト

- ・友人関係が固定化している。
- ・多くの子から名前が挙げられていない児童もいるが、全く友達の名前が書けない児童、他の子から名前が挙げられていない児童もいる。
- ・情緒特別支援学級在籍児童は、交流学級の中で友人関係をあまり築けていない様子である。

#### ④YP (子どもの社会的スキル横浜プログラム)

- ・自己効力感、自尊感情が低い児童が多い。
- ・自己表現が低い児童は、学級居心地感が低いことがわかった。よって、自己表現の力と学級居心地感は、ほぼ比例していると言える。
- ・共感配慮のスキルが低い児童には、対人関係のトラブルが多く見られる。

### (3) SST ターゲットスキルの設定

SST のスキルの領域については、今まで広範な領域の研究者や実践家によって、様々な意味を込めて使用されてきたため、統一的なものはない。河村（2007）は、学級生活で必要とされるソーシャルスキルとして、「配慮のスキル」「かかわりのスキル」と挙げている。上野・岡田（2006）は、「集団行動」「セルフコントロール」「仲間関係」「コミュニケーション」を挙げている。岩澤（2014）は、「友達づくりのスキル」「相手の気持ちを考えるスキル」「自分の気持ちを伝えるスキル」「感情をコントロールするスキル」と挙げている。このように、SST のスキルの領域は様々であるが、(2) ①②③④の実態把握の結果から、X 市立 A 小学校第 4 学年 B 組の SST ターゲットスキル（図 2）と内容（表 1）を以下のように設定した。

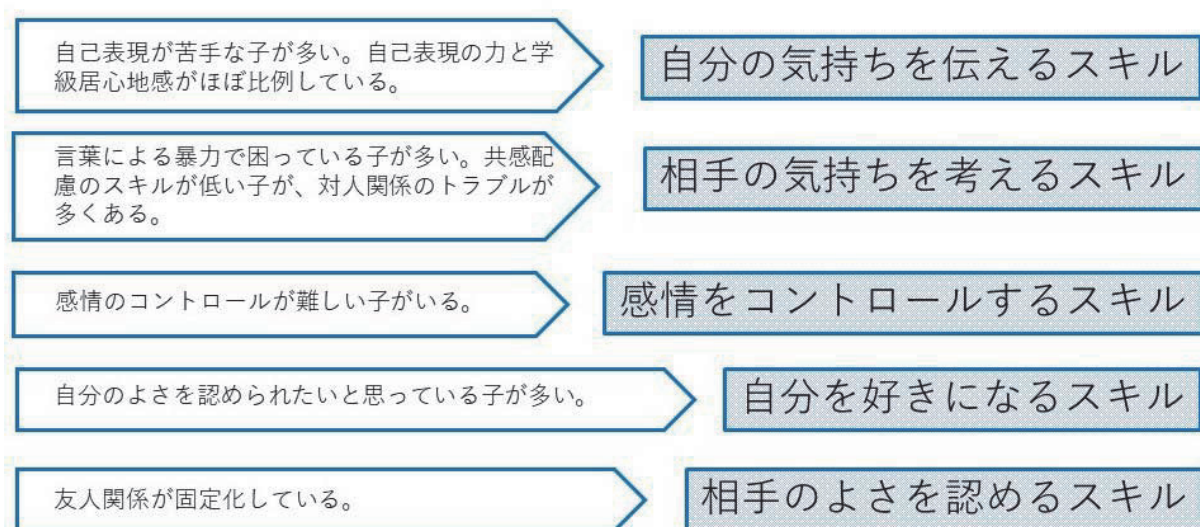


図 2 実態把握と SST ターゲットスキルのつながり

表 1 SST ターゲットスキルと内容

SSTターゲットスキル	内 容
自分の気持ちを伝えるスキル	夏休みのふりかえり質問じゃんけん ありがとうチャンス さわやかさんのセリフを考えよう
相手の気持ちを考えるスキル	夏休みのふりかえり質問じゃんけん ふわっと言葉、ちくっと言葉 ありがとうチャンス さわやかさんのセリフを考えよう
感情をコントロールするスキル	「いかり」について考えよう
自分を好きになるスキル	リフレーミングで短所を長所に変えよう クラスの中の自分
相手のよさを認めるスキル	リフレーミングで短所を長所に変えよう クラスの中の自分

### Ⅲ. 実 践

(1) 授業実践 (9月～12月 計8回)

①夏休みのふりかえり質問じゃんけん

②ふわっと言葉、ちくっと言葉

③ありがとうチャンス

みんながありがとうと伝えたい場面を掲示し、1週間「ありがとう」と言った数を集計する活動につなげた。取り組んだ結果、2039回になり、クラス全体において「ありがとう」と言う意識が高まった。

④さわやかさんスタイルチェック

⑤さわやかさんのセリフを考えよう

⑥「いかり」について考えよう

⑦リフレーミングで短所を長所にかえよう

自分の短所を友達に長所に変えてもらい、自己理解、他者理解を深める手立てとした(図3)。

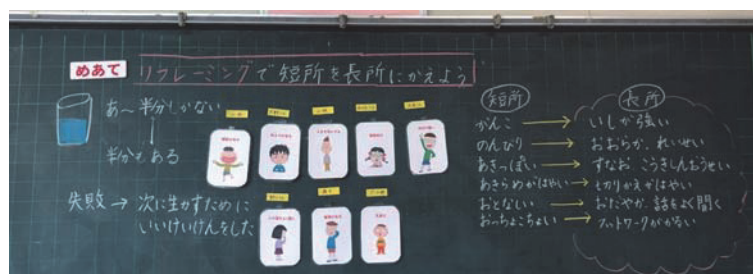


図3 「リフレーミングで短所を長所にかえよう」板書

⑧クラスの中の自分

クラスの友達一人一人の「いいところ」を発見し、分かち合うことを目的にした。「正直な人」「やさしい人」等、いいところが先に示してあるので、友達の名前を書くだけでよく、言葉での表現が苦手な子どもでも、取り組みやすいというメリットがある(図4)。後日、ワークシートに書かれた名前は切り離して一人一人のものを集めて貼ったカードを、実習最終日にプレゼントした。子どもたちは、とても喜んで自分のカードだけでなく、友達のカードもじっくり見る姿が見られた(図5)。

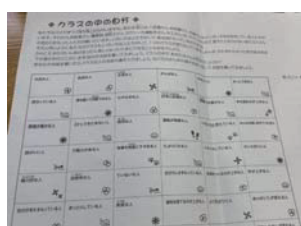


図4 「クラスの中の自分」ワークシート



図5 クラスの中の自分カード

(2) 心ほぐし活動

絵本の読み聞かせや「バースデーライン」などのアイスブレイク、CSSTを行う授業開始前に黙想と呼吸を組み合わせた1分間程度の簡単なリラックス法を行った。

(3) ソーシャルスキルワークブック・ソーシャルスキルだよりの発行



ワークシートを学習後もふりかえって見るができるよう製本したソーシャルスキルワークブックやCSSTの概要や子どもたちの感想を中心にのせたソーシャルスキルだよりも定期的に発行した。

#### IV. 考 察

##### (1) Q-U (楽しい学校生活を送るためのアンケート)

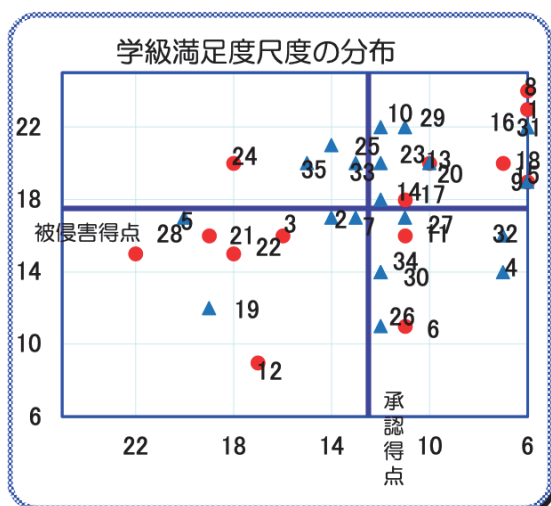


図6 Q-U 学級満足度尺度 プロット図 (5月)

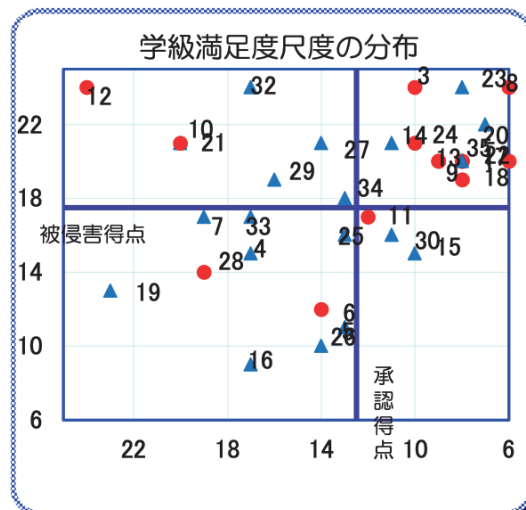


図7 Q-U 学級満足度尺度 プロット図 (12月)

5月実施(図6)と12月実施(図7)を比較すると、個人の変化として以下のことが明らかになった。(番号は出席番号)

- ・12…5月要支援群→12月侵害行為認知群。  
被侵害得点、承認得点が上がっている。  
クラスの仲間からの承認が以前よりも実感できていると同時に衝突が増えた可能性が伺える。
- ・16…5月満足群→12月不満足群。観察では本人の荒れ等とはとられなかったが、承認得点が下がり、被侵害得点は上がっている。学級生活に不満が生じてきた様子が伺える。
- ・3、22…5月不満足群→12月満足群。観察でも、以前より笑顔が多く見られるようになった。
- ・24…5月侵害行為認知群→12月満足群。以前より友達の関わりが多くなっている。

また、学級全体の変化として、以下のことがわかった。

- ・学級生活満足群が増えた(5月11人→12月13人)。
- ・女子の学級生活満足群が増えた(5月5人→12月9人)。
- ・男子の不満足群が増えた(5月6人→12月9人)。
- ・非承認群が減った(5月7人→12月2人)。
- ・承認得点の変化について着目してみると、縦軸の承認得点は、上に行くほど人から認められていると感じる度合いが高いことになるが、12月は上の方に位置している子が5月に比べて増えている。よって、クラスの人から認められていると実感できている子が増えていることがわかる。
- ・被侵害得点の変化について着目してみると、横軸は被侵害得点で、左に行くほど人から嫌な事を言われたりされたりすると感じる度合いが高いことになるが、12月は5月よりも左側に広がっていることがわかる。よって、悪ふざけや冷やかしを受けたり、不適応感を持ったりしている子が増えている様子が伺える。

## Q-U 質問項目において特に気になる項目と結果

あなたは、運動や勉強、係活動、趣味等でクラスの人から認められることがありますか。

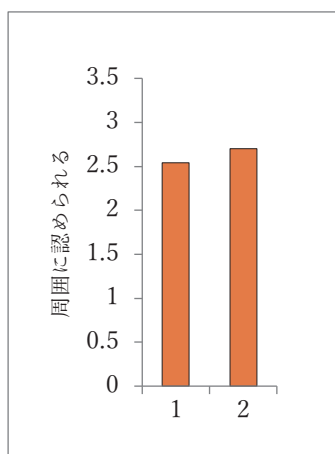


図8 承認質問1の平均比較

承認質問1の平均比較(図8)では、1回目(5月)は約2.5点、2回目(12月)は約2.7点となっており、0.2平均が上がっている。この結果は、日頃の学級経営、子どもたちの関わりに加えて、CSSTの自分を好きになるスキル、相手を認めるスキル「リフレーミングで短所を長所にかえよう」、「クラスの中の自分」の活動も効果があったのではないかと考える。国立教育政策研究所(2012)によると、認められて自信を持つ、という発想が、子どもの自信が持続しやすく、人の役になった、感謝されたという「自己有用感」、に裏付けられた「自尊感情」が大切と言われている。このことから、学級において認められることは、子どもたちにとって大切なことだと言える。

あなたは、クラスの人に嫌なことを言われたり、からかわれたりして、つらい思いをすることがありますか。

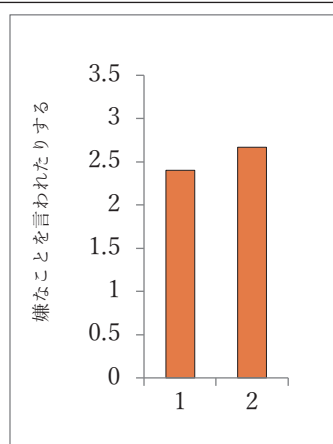


図9 被害質問1の平均比較

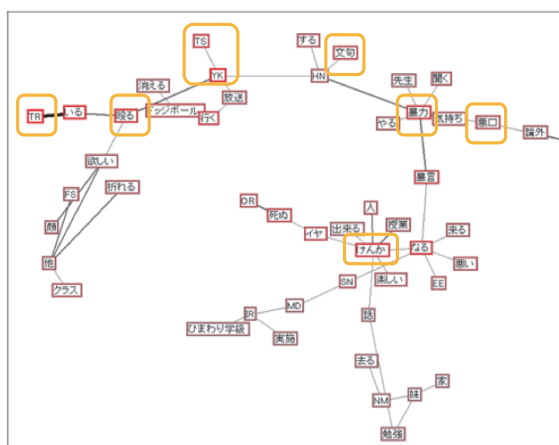


図10 テキストマイニング分析による関係図

被害質問1の平均比較(図9)では、1回目(5月)は約2.4点、2回目(12月)は約2.7点となり、0.3上がっている。実習中の観察においても、特定の児童がささいなことから自分の感情をコントロールできず暴言や暴力で傷つけあったり、クラスの大部分の児童が特定の児童からの暴力や暴言で心を痛めていたりする様子が見られるようになった。また、第4学年B組担任からも、日々暴力や暴言の対応に追われ、学級経営が困難な状況の時もあるという話を伺うことがあった。

図10は、11月下旬にY小学校全体で実施した相談カードに子どもたちが書いていた文に出ていた言葉をトレンドリサーチ2015(社会情報サービス社)のテキストマイニングを用いて分析したものである。

「けんか」や「暴力」、「殴る」や特定の児童の名前などが、他の言葉よりも赤字囲みの線が太いことか

ら、それらの言葉を書いた児童が多かったことがわかる。この分析からも学級において被侵害行為があり、そのことで心を痛めている児童が多くいることが考察された。

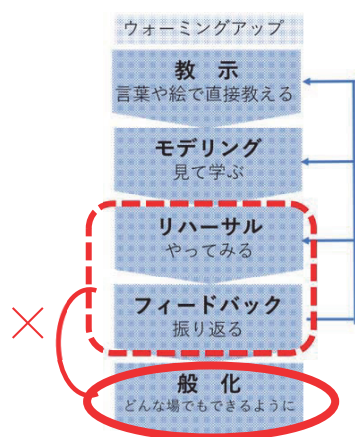


図11 SST手順 般化関係図

そのため、本研究のCSST 授業実践においては、ターゲットスキルとして相手の気持ちを考えるスキル「ちくつと言葉、ふわつと言葉」、や感情をコントロールするスキル「いかりについて考えよう」の活動も行った。しかし、この被侵害感の高まりは、CSST で学んだスキルを意識して生活できた子もいれば、ほとんどスキルが定着してない子もいるということが明らかになった。実践の反省として、それぞれの授業において SST の手順としての教示やモデリングを行うことができたが、実習という限られた時間の中で日常生活における場をその都度取り上げて、リハーサルやフィードバックを繰り返すことが十分にできなかった。そのことが一部の子にとって般化につながらなかったのではないかと考えられる（図11）。

國分・小林・相川（1999）は、ソーシャルスキル教育を実施して、その効果を検討する際のチェックポイントとして、

- ①楽しい雰囲気の中で行う。
- ②学級の人間関係が乱れているときは、個別対応から行う。
- ③教師と子どもの関係が良好である。
- ④不安や怒り等の感情の問題を抱えている場合。
- ⑤ソーシャルスキル教育に取り組む子どもの意欲の程度。
- ⑥教えるソーシャルスキルは子どもの実態に合ったものか。
- ⑦用いるモデルは適切か。
- ⑧リハーサルは楽しめるように工夫されているか。
- ⑨適切なフィードバックが与えられているか。

を挙げている。このチェックポイントの⑧、⑨にも書かれているように、リハーサルとフィードバックは大変重要であることがわかる。

このことにより、特定の子を含めた学級全体の般化につなげるためには、担任を始めとした教師だけでなく、周囲の仲間からも、適切な振る舞いには適切な評価を与えたり、保護者にも、ソーシャルスキルの大切さを知らせ、ともに子どものソーシャルスキルを育てるためにも、家庭において学んだソーシャルスキルをリハーサルし、適切なフィードバックを与えてもらうように連携したりすることが大切であると考えられる。

しかし、一部の児童には般化につながらなかったものの、クラスの大部分の児童からは実習後に、CSST の道德の時間がみんなにとって大切な時間だったというメッセージをもらい、CSST を計画的・継続的に行ったことは、価値があったと嬉しく感じた。

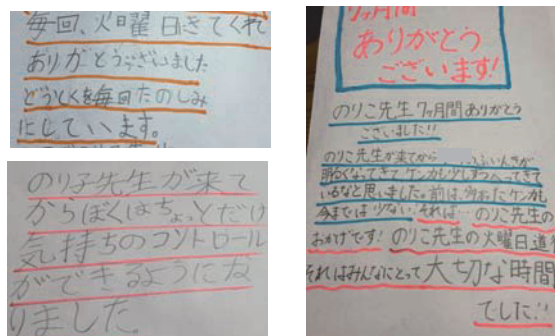


図12 児童からのメッセージ

## (2) ソーシャルスキルアンケート

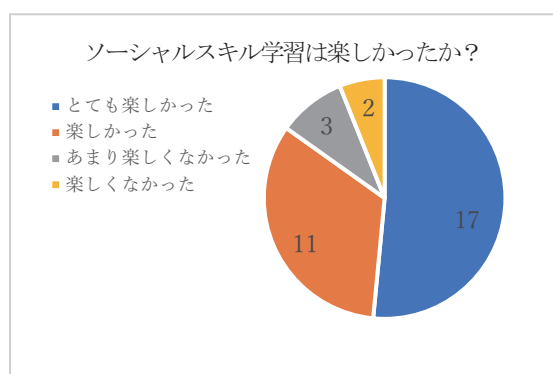


図 13 ソーシャルスキルアンケート質問 1 結果

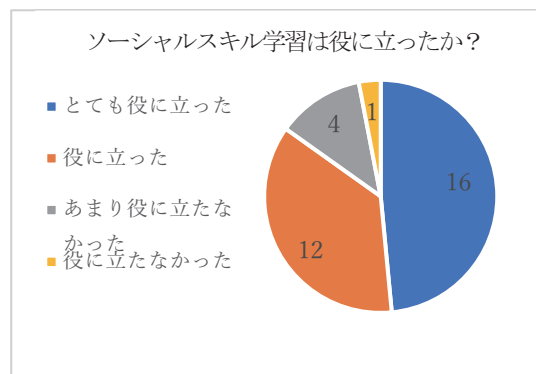


図 14 ソーシャルスキルアンケート質問 2 結果

8 回の CSST 実践を終えた 12 月上旬に、第 4 学年 B 組において、ソーシャルスキルアンケートを実施した。

その結果、ソーシャルスキル学習が楽しかったか、役に立ったかという質問において肯定的な回答をした児童が 33 人中 28 人（図 13、図 14）、ソーシャルスキルが大切かという質問でも 33 人中 30 人と、多くの児童がソーシャルスキル学習に肯定的で ソーシャルスキルが大切と答えていた。

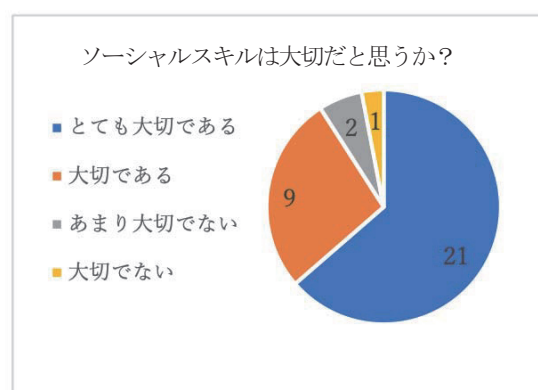


図 15 ソーシャルスキルアンケート質問 3 結果

ソーシャルスキルアンケートの結果において、否定的な回答をしていた子どものうち 3 名は、情緒特別支援学級在籍であり、交流学級として第 4 学年 B 組で国語、算数、社会以外の教科を学習したり、給食、掃除等の時間を共に過ごしたりしている。特別支援学級在籍児童が交流学習の SST において否定的な回答をしていた理由について考察してみたところ、2 つのことが挙げられた。

一つ目は、グルーピングの問題である。情緒特別支援学級在籍児童の座席は 4 月から 7 月までは教室後方に、9 月から 12 月までは窓側一列に固定されており、班編成もその子達だけの班となっていた。そのため SST 学習を行う時には、できるだけいろいろな子に関わらせたいという思いから、人間関係に考慮しながら、他のグループに一人ずつ分かれて入ってもらうことが多かった。すんなり入ることができる時もあったが、特に 3 名のうちの 1 名の児童は「この班は嫌だ。」と言って活動しないことが多かった。日頃から同じ班で活動を重ねていけば、そのような抵抗感も少なかったのではないかと考える。

二つ目が、特別支援学級在籍の子達に応じた SST が十分にできなかったということである。佐藤・佐藤（2006）によると、攻撃的な子どもに対するスキル指導の実施形態として確実な効果が期待できるのは、個別指導であり、理想的には、集団指導と並行して、特定の攻撃児に対するスキルの個別指導を実施することが推奨される、と述べている。そのため、学級単位 SST においては、担任や支援だけでなく、周りの子どもたちからのサポートを加えながら取り組み、全体指導後に特別支援学級において小グループまたは個人で同様の SST や関連する SST に取り組んでもらうことも一つの方法かと考える。また、活動内容もさらに視覚的にとらえやすく興味関心が持続しやすいものに工夫することが大切と思われる。



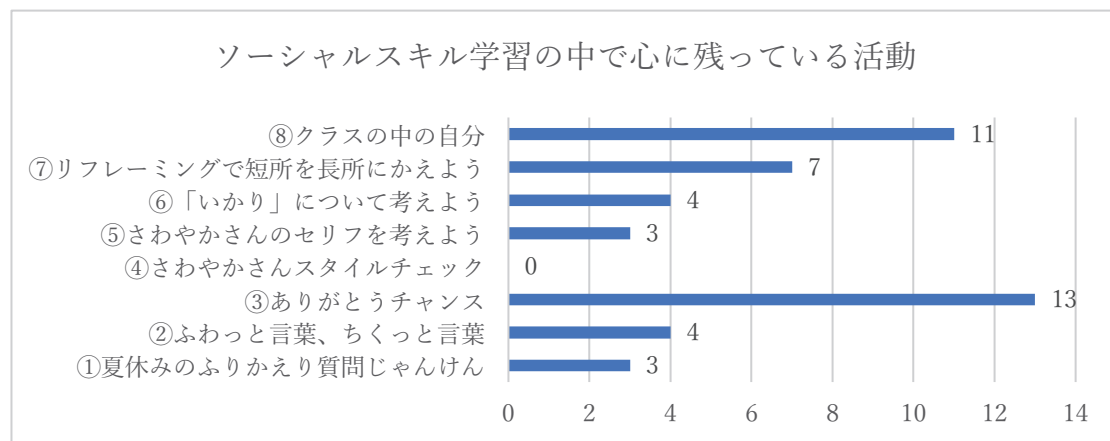


図 16 ソーシャルスキルアンケート質問4 結果

ソーシャルスキル学習の中で心に残っている活動として、図 16 のアンケート結果で子どもたちが多く挙げていたものについて、子どもたちの感想と合わせて考察した。

#### ありがとうチャンス

・自分たちが「ありがとう」とこんなに言っていると実感できたから。

→「ありがとう」の数を毎日集計する活動を継続して行ったことにより、意識が高まった。

#### リフレーミングで短所を長所にかえよう

・人の短所を長所にかえることで相手が自信を持つだろうと思ったから。

→リフレーミングすることにより、自分に自信が持てた、友達が喜んでくれた等その場でもよさをすぐ実感しやすい内容だった。

#### クラスの中の自分

・みんなの持ち味を知ることができたから。

・みんなのいいところがわかり合えたから。

→ワークシートがわかりやすく、子どもたちにとって取り組みやすい内容だった。友達のことを思い浮かべながら自分のペースで活動できたことで、相手のよさを認めたり、自分のよさを見つけたりすることができた。

第4学年B組の子どもたちにとって、自分を好きになるスキル、相手のよさを認めるスキルをターゲットにした活動は、すぐによさを実感できる、自尊感情も高まるという点で、心に残り、有効だったということが考えられる。

## V. 全体考察

最後に、本研究を通して得られた、私が考える「子どもが『つながり』成長を実感できる学級づくり」にとって大切なことについて、3つ述べる。

一つ目は、実態把握である。Q-Uをはじめとしたアセスメントツールを使って、実態把握を行ったことにより、全体的な傾向を詳しくつかむことができ、SST ターゲットスキルの選定につながった。子ども、学級の実態把握をすることが、適切な対応、方策づくりに役立つことがわかった。また、実習校において、Q-Uを2回実施し、比較し、考察することで、子ども、学級の変化、成長についてとらえることができた。

二つ目は、学級単位 SST (CSST) を計画的・継続的に行うことは、学級づくりの有効な手立ての一つになるということである。実践、考察を重ねる中で、子どもたちが学んだソーシャルスキルを、学級活動、学校生活全般、学級経営に生かしていくためにも、学級担任を始めとした教員が子どもに身につけてほしいスキルについて、常に意識をもって、日頃から子どもと関わるのが大切である。また、状況に応じて工夫、改善を加えながら実施すること、般化のためには、適切な評価を繰り返し行うことが必要である。

三つ目は、学級におけるマナーやルールの確立や認め合いである。実習校においては、一部の子どもの暴力・暴言等により被侵害感を持つ子どもが多く、そのことが、学級全体の学級生活満足度と大きく関わっていることが考察された。河村 (2004) が述べる学級生活の満足感・充足感を向上させるための重要な手立てとして挙げられる次の 2 点を達成することが不可欠である。

- 学級生活において人から傷つけられないこと、ストレスが低いこと。
- 学級内で子どもたち一人一人の所属欲求、承認欲求を満たすこと。

このように、実践を通して学ぶことができた 3 つを大きな柱としながら、学習面ではユニバーサルデザインで子どもたちに「わかる」「できる」「楽しい」と実感させる授業づくり、担任自身がソーシャルスキルを高めて、子どもと思いを伝え合い信頼関係を築くこと、保護者と共に子どもの成長を願い、協働していくことも大切だと考える。

また、クラスの子どものだけでなく、学校全体に広げていく取組も必要である。そのためにも、学校全体で CSST を始めとしたカウンセリングマインドに基づいた学級づくりの方法等も学び合い、子どもたちにその学びを還元することによって、学校が楽しい、自分も友達も好きという子どもを増やしていくように心掛けたい。

## 引用・参考文献

- ・藤枝静暁・相川充 (2001)『小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討』教育心理学研究
- ・岩澤一美 (2014)『クラスが変わる！子どものソーシャルスキル指導法』ナツメ社
- ・河村茂雄 (2007)『いま子どもたちに育てたい 学級ソーシャルスキル 小学校中学年』図書文化社
- ・河村茂雄他 (2004)『Q-U による学級経営スーパーバイズ・ガイド』
- ・國分康孝監修・小林正幸・相川充編著 (1999)『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる小学校』図書文化
- ・国立教育政策研究所 (2015)『「自尊感情」？それとも「自己有用感」』国立教育政策研究所生徒指導リーフ 18
- ・NPO 星槎教育研究所 (2006)『クラスで育てるソーシャルスキル』日本標準
- ・佐藤正二・佐藤容子 (2006)『学校における SST 実践ガイド』金剛出版
- ・Slobora, J (1986)『What is skill? In A. Gellstly (Ed.) The skill mind : An Introduction to cognitive psychology.』Open University Press. Milton Keynes.
- ・上野一彦・岡田智 (2006)『特別支援教育実践ソーシャルスキルマニュアル』明治図書